

# 2012 年度 日本精神分析的な心理療法フォーラム 第 1 回大会

主催： 日本精神分析的な心理療法フォーラム

後援： 甲南大学人間科学研究所 ・ 京都文教大学心理臨床センター  
KIPP 桃山心理オフィス ・ NPO 法人こどもの心理療法支援会

## ご挨拶

「精神分析的な心理療法フォーラム」がはじめて開催されたのが 2007 年 12 月 2 日のことですから、今回の大会でちょうど 5 年が経過したことになります。その間、フォーラムは、発起人、世話人の皆様、そして何より参加して下さった方々の手によってますます発展し、今年度、学会化を実現することができました。学会としてのフォーラムの第 1 回大会を開催できますことを、関わってこられたすべての方々に感謝いたします。

日本精神分析的な心理療法フォーラムは、精神分析を幅広い実践現場で生かすための議論を深める場を提供するとともに、精神分析に関心を持つ若手臨床家や大学院生に研修の場を提供していきたいと思ひます。幅広い精神分析的な心理療法の普及、発展と、実践家の自己研鑽の場としてフォーラムが発展していくことを願っています。また多くの方が参加され、フォーラムの趣旨の実現に協力下さることを、この場を借りてお願いいたします。

日本精神分析的な心理療法フォーラム 会長・第 1 回大会長  
森 茂起

### <日本精神分析的な心理療法フォーラム 理事> (50 音順・敬称略)

今江秀和、宇土知里、角田 豊、金沢 晃、川畑直人、飛谷 渉、  
平井正三、広瀬 隆、藤原雪絵、宮田智基、森 茂起

# プログラム

12月15日(土)

9:00 10:00

12:30 13:30

16:00 16:30

19:00 19:30 20:30

受付	分科会①	総会	分科会③	休憩	全体会① (途中15分休憩)	休憩	懇親会
	分科会②		分科会④				
	ワークショップ①		ワークショップ④				
	ワークショップ②		ワークショップ⑤				
	ワークショップ③		ワークショップ⑥				

12月16日(日)

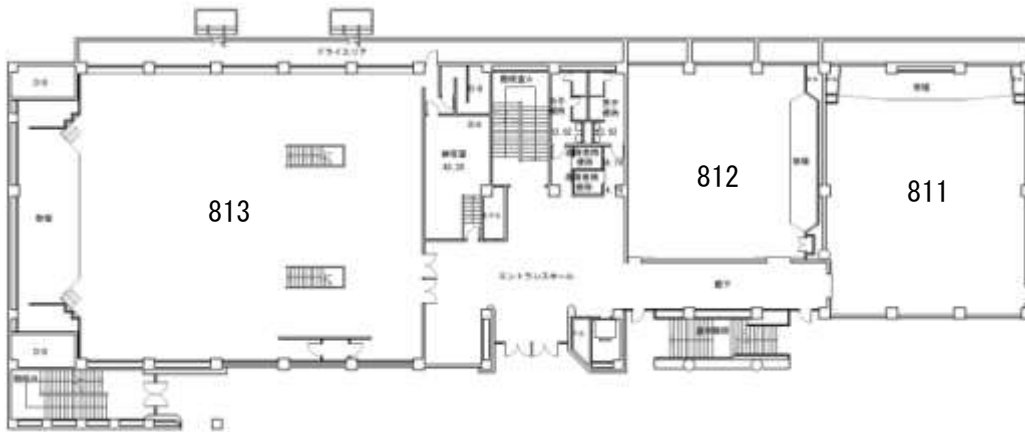
9:00 10:00

12:30 13:30

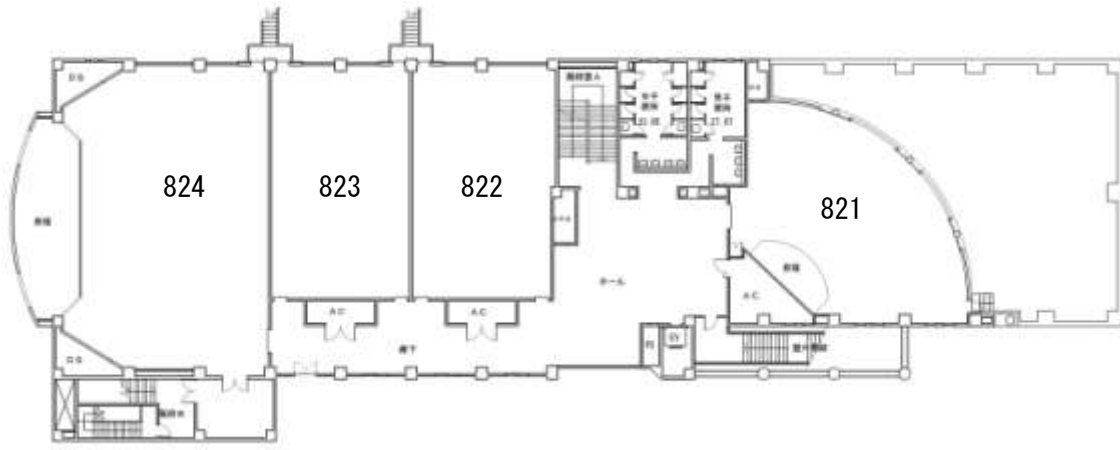
16:30

受付	分科会⑤	休憩	全体会② (途中15分休憩)
	分科会⑥		
	個人発表①②③		
	個人発表④⑤		
	ワークショップ⑦		

## 8号館1階



## 8号館2階



12月15日(土)

◆10:00~12:30

<分科会>

①精神分析における師弟関係をめぐって【811 教室】

企画・司会者：上田勝久（京都民医連中央病院太子道診療所）

話題提供者：上田勝久（京都民医連中央病院太子道診療所） 疋田基道（クリニックソフィア）

北岡征毅（こころのクリニック和-なごみ-）

指定討論者：北村隆人（東洞院心理療法オフィス・太子道診療所）

②対人関係論の鍵概念を取り上げる②-解離モデル：『未構成の経験』という考え方【821 教室】

企画者：家次安子（淀川キリスト教病院附属クリニック、KIPP 精神分析協会）

司会者：馬場天信（追手門学院大学、KIPP 精神分析協会）

話題提供者：宮田智基（清風会 香良病院、KIPP 精神分析協会）

野原一徳（バイオメンタルクリニック、KIPP 精神分析協会）

長川歩美（A&C 中之島心理オフィス、KIPP 精神分析協会）

指定討論者：川畑直人（京都文教大学、KIPP 精神分析協会）

<ワークショップ>

①発達障害の世界の探求-精神分析的アプローチ【822 教室】

演者：平井正三（御池心理療法センター）

事例提示：松本拓真（佛教大学学生相談室）

淀直子（佛教大学臨床心理学研究センター・心理クリニック）

②トラウマの精神分析的な理解と臨床-フェレンツィから現代精神分析まで【823 教室】

演者：森茂起（甲南大学文学部人間科学科）

③精神分析的な小集団心理療法における心的安全空間の設計-事例検討を通じて-【824 教室】

演者：ジェイムス朋子（京都橘大学健康科学部）

事例提示：橋本麻耶（PAS 心理教育研究所）

◆12:30~13:30

総会【813 教室】

昼休みに総会を行います。会員の方はご出席ください。

◆13:30~16:00

<分科会>

③精神分析的な心理療法の原点を探る-現代自己心理学と関係論の立場から-【811 教室】

企画者：富樫公一（甲南大学、栄橋心理相談室、TRISP 自己心理学研究所）

司会者：中西和（あいせい紀年病院臨床心理室）

事例提示：峯石裕之（独立行政法人国立病院機構香川小児病院）

指定討論者：角田豊（京都連合教職大学院、京都産業大学）

安村直己（甲子園大学）

④学校教育現場において精神分析的であるということ【821 教室】

企画・司会者：上田順一（大倉山子ども心理相談室）

演者：上田順一（大倉山子ども心理相談室）

人見健太郎（みとカウンセリングルームどんぐり）

植木田潤（独立行政法人国立特別支援教育総合研究所）

指定討論者：服部真紀子（弁天メンタルクリニック）

佐藤由美子（公立中学校スクールカウンセラー）

## <ワークショップ>

### ④統合失調症の精神分析的な心理療法入門【822 教室】

演 者：青木滋昌（名古屋精神分析研究所、ニューヨーク NPAP 精神分析研究所）  
事例提示：青木滋昌（名古屋精神分析研究所、ニューヨーク NPAP 精神分析研究所）  
寺田葉子（名古屋精神分析協会）

### ⑤「アルプスの少女ハイジ」とメタファーの理解【823 教室】

演 者：太田裕一（静岡大学保健センター）

### ⑥詳細な質問入門—対人関係精神分析の基礎（2）【824 教室】

演 者：川畑直人（京都文教大学、一般社団法人京都精神分析心理療法研究所）

## ◆16：30～19：00

### <全体会>

#### ①現代精神分析の実践的チャレンジ【813 教室】

司会：角田 豊（京都連合教職大学院、京都産業大学）  
宇土知里（名古屋精神分析協会）

シンポジスト

産業臨床領域 川畑直人（京都文教大学、一般社団法人京都精神分析心理療法研究所）  
病院臨床領域 北村隆人（京都民医連中央病院）  
学校臨床領域 鈴木 誠（くわな心理相談室）  
学生相談臨床領域 飛谷 渉（大阪教育大学）

## 12月16日（土）

### ◆10:00～12:30

### <分科会>

#### ⑤スターンの臨床と未構成の経験【811 教室】

企画・司会者：川畑直人（京都文教大学、一般社団法人京都精神分析心理療法研究所）  
話題提供者：鈴木健一（名古屋大学、一般社団法人京都精神分析心理療法研究所）  
吾妻 壮（大阪大学）  
指定討論者：横井公一（浜寺病院）  
川畑直人（京都文教大学、一般社団法人京都精神分析心理療法研究所）

#### ⑥クライン派と対人関係学派との対話—事例検討を通して—【821 教室】

企画者：金沢 晃（美作大学生生活科学部、NPO 法人子どもの心理療法支援会）  
宮田智基（清風会 香良病院、KIPP 精神分析協会）  
話題提供者：平野かおり（竜安寺カウンセリングルーム、KIPP 精神分析協会）  
溝端伸枝（谷町こどもセンター・関西心理センター、NPO 法人子どもの心理療法支援会）  
指定討論者：金沢 晃（美作大学生生活科学部、NPO 法人子どもの心理療法支援会）  
宮田智基（清風会 香良病院、KIPP 精神分析協会）

### <個人発表>

#### 【822 教室】

##### ①臨床場面における初回夢の意味とその取り扱いについて

演 者：広瀬 隆（帝塚山学院大学、北大阪こころのスペース）  
垣内宏樹（吹田市立教育センター、北大阪こころのスペース）

##### ②人形遊び技法による就学前児童の発達水準と表象世界の評価

演 者：石谷真一（神戸女学院大学大学院人間科学研究科）

##### ③精神分析的な心理療法における「的確な説明の提供」の有用性について

演 者：清川雅充（柏崎厚生病院）

**【823 教室】**

④短期力動的集団精神療法における薬物依存症者に対する構造的介入と心的安全空間の生成過程

演 者：ジェイムス朋子（京都橘大学健康科学部）

辻 啓之（京都刑務所）

⑤アスペルガー症候群の混乱状態とマネージメント—認知・情緒的偏りの発達過程の理解と対応—

演 者：吉沢伸一（ファミリーメンタルクリニックまつたに）

<ワークショップ>

⑦子どもの精神分析的心理療法の基礎：児童養護施設編【824 教室】

演 者：鶴飼奈津子（大阪経済大学人間科学部）

共同演者：秦 香（児童養護施設 博愛社）

堀内 瞳（大阪経済大学心理臨床センター）

辻内咲子（大阪市こども相談センター）

◆13：30～16：30

全体会

②フロイトとその現代的意義

企 画：平井正三（御池心理療法センター）

司 会：森 茂起（甲南大学）

話題提供：福本 修（代官山心理・分析オフィス、恵泉女学園大学）

立木康介（京都大学）

指定討論：富樫公一（甲南大学、栄橋心理相談室、TRISP 自己心理学研究所）

金沢 晃（美作大学生活科学部、NPO 法人子どもの心理療法支援会）

## 全体会①

12月15日(土) 16:30~19:00【813教室】

### 現代精神分析の実践的チャレンジ

#### 企画趣意

心理療法が行われるさまざまな領域において、現代の精神分析はどのように生かされているのかを、各現場において実践されている方々に聞く。

現在、心理療法は多様な領域において多様な手法が用いられているが、その中で精神分析的なアプローチが持ちうる意義や効果、普遍性などがどのようなものかについて、各シンポジストが日頃感じておられることをお聞きし、精神分析と各領域が有する特徴との関係性などについて、シンポジストとフロアの対話によって深めていく。

司会：角田 豊（京都連合教職大学院、京都産業大学）  
宇土知里（名古屋精神分析協会）

#### シンポジスト

産業臨床領域 川畑直人（京都文教大学、一般社団法人京都精神分析心理療法研究所）  
病院臨床領域 北村隆人（京都民医連中央病院）  
学校臨床領域 鈴木 誠（くわな心理相談室）  
学生相談臨床領域 飛谷 渉（大阪教育大学）

## 全体会②

12月16日(日) 13:30~16:30【813教室】

### フロイトとその現代的意義

#### 企画趣旨

フォーラム学会化の初年度企画として、精神分析の原点であるフロイトを再訪する。現代日本において、フロイトはいったいどのような意義を持つのかという点について、精神分析臨床という観点から、そして治療文化、ひいては文化社会的観点から討議する。

企画：平井正三（御池心理療法センター）

司会：森 茂起（甲南大学）

#### 話題提供：福本 修

精神科医、そして日本精神分析協会認定分析家の資格を持つ立場、日本の精神分析臨床のいわば主流にいる立場からフロイトの現代的意義を論じていただく。

#### 立木康介

ラカン派の分析訓練を受けるとともに、文化・思想の動向に詳しい立場から、特に文化・社会的側面でのフロイトの現代的意義を論じていただく。

指定討論：富樫公一（甲南大学、栄橋心理相談室、TRISP 自己心理学研究所）  
金沢 晃（美作大学生活科学部、NPO 法人子どもの心理療法支援会）

**①精神分析における師弟関係をめぐって**

企画・司会者：上田勝久（京都民医連中央病院太子道診療所）

話題提供者：上田勝久（京都民医連中央病院太子道診療所）

疋田基道（クリニックソフィア）

北岡征毅（こころのクリニック和ーなごみー）

指定討論者：北村隆人（東洞院心理療法オフィス、太子道診療所）

**企画趣旨**

精神分析臨床を志向する上で、師弟関係が私たちの臨床観やプラクティスに深く影響することはたしかなことでしょう。

師弟関係は単にバイザーとバイジー、指導者と生徒、先達と後進という関係枠にとどまるものではありません。フロイトとその弟子たちが、いかに生々しく、パーソナルに、ある種の擬似家族的雰囲気の中で精神分析という文化を生きてきたかは周知のとおりです。そして、その事情は現代においても変わらないように思えます。

本分科会はこの師弟関係の意味、師弟関係の形態、師弟関係が師と弟子それぞれの臨床にもたらすものなど、様々な視点から師弟関係について考えることを目的としています。

精神分析は座学による習熟が不可能な分野です。しからば、ほとんどの分析的臨床家は何らかの師弟関係を生きる中で現在の臨床スタンスをつかんできたはずで、師弟関係が私たちの臨床になげかけるものを改めて問い直してみたいと思います。

**話題提供：**上田勝久（京都民医連中央病院太子道診療所）

**師弟関係という家族**

臨床における師弟関係は私たちの臨床理論、日々のプラクティス、場合によっては生き方そのものにまで深く浸透してくるものです。

フロイトの伝記を紐解くと、そこにはあまりにも生々しい師弟関係がえがきだされています。あたかもフロイトを父としたひとつのファミリーの生き様が展開されているようです。特に精神分析的臨床というきわめてパーソナルな営みに従事しようとする治療者にとっては、その師弟関係は大なり小なりこうした疑似家族的様相を呈するように私には思えます。その中でエディパル・プレエディパルな葛藤や同胞葛藤、承認欲求、排除されることへの不安など、様々な想いが私たちのこころに兆します。それは教育分析とはまた異なる水準で私たちのこころを揺さぶり、私たちの臨床に色濃く反映されていくはずで、

精神分析という営みは家族のメタファーに満ちています。私たちはそうしたメタファーをもとに事を考え、事を練り上げていきます。しからば、この営みに身を投じる臨床家にとって、師弟関係における家族的性質について一考しておくことは重要な意義をもつように私は思います。本発表では、この師弟関係における家族的性質がどのような意味をもち、どのように臨床場面に反映されていくのかを検討していくつもりです。

**キーワード：**師弟関係、家族、精神分析的な心理療法

**話題提供：**疋田基道（クリニックソフィア）

**精神分析臨床における師弟関係をめぐって—師弟関係とそれ以外の関係性の重複—**

私の師との関係は、A-T スプリットにおける主治医 - セラピストの関係でもあり、さらには雇用者 - 被雇用者の関係でもある。このような個人的な体験をもとに、精神分析臨床における師弟関係について私見を述べてみたいと思う。

師弟関係にそれ以外の関係が重複することで、弟子は現実生活や精神的な生活の多くの部分を師の詠った設定の中で営むことになる。その設定が厳密で弟子の力が及ばないものであればあるほど、そこに弟子の転移や空想が展開しやすい。私自身のことで言うと、医療機関であるが故に主治医の判断によって精神療法を行う患者が選ばれ、治療構造の大枠も主治医によって設定される。それに加えてスーパービジョンでの指導もあり、さらには当然あるが雇用条件も院長によって決められる。このような背景の中で私は無力感や迫害感を経験していった。

この状況は大変苦しいものであったが、私はこの状況を生き抜いていくことが、精神分析的な生き方そのものではなかろうかと考えるようになっていった。そのプロセスを通して、自身の転



移気付いていくこと、預かり知らない他者の主体性が自分の外側にあることに気付くこと、そしてそれに支えられていることに気づきそれに委ねることができるようになることを通して、主体性や創造性を発揮していけるようになること、それが精神的に生きていくことではなからうか。当日はより具体的な例を挙げて発表していきたいと思う。

**キーワード：**師弟関係、関係性の重複、A-T スプリット

**指定討論：**北岡征毅（こころのクリニックー和みー）

#### **内的対象としての精神分析ースーパーヴィジョンで醸成されるものー**

精神分析は、平等に規格化された近代の学校教育というシステムでは学ばない創造的活動であろう。精神分析における教育は、演奏家にとってのそれと似ている。その本質は対一の師弟関係である。演奏家を志す者は、自分が出す音と奏でる音楽を真には聴くことができず、傍らにそれを聴き取る師匠の耳を必要とする。精神分析を志向する治療者は、スーパーバイザーと教育分析家という師を通じて精神分析に出会い、師弟の交わりを基本にひとりの精神的臨床家として成長していく。

本稿では精神的師弟関係の中でも特にスーパービジョン（SV）に焦点を当てる。SVで目的として伝えられ学び取られるのは、ケースの精神的理解であり技法である。それと同時にスーパーバイザーには、内的対象としての精神分析が内在化されるのではないだろうか。患者の自己がいかなる性質の内的対象とどのように幻想を営むのかが、その人物の生に影響を与え続けるというのが、クラインとその弟子たちの基本的なアイデアである。とするならば、スーパーバイザーがどのような内的対象としての精神分析を内在化するかは、彼の心理療法に対する態度に自ずと影響するだろう。当日は、クライン派の臨床を志向する発表者が、精神分析における師弟関係というテーマを、内的対象としての精神分析という観点から考察し、それが実際の臨床にどう反映されていくかを、実際の臨床素材をもとに検討したい。

**キーワード：**内的対象としての精神分析、スーパーヴィジョン、クライン派

**②対人関係論の鍵概念を取り上げる②—解離モデル：『未構成の経験』という考え方**

企画者：家次安子（淀川キリスト教病院附属クリニック、KIPP 精神分析協会）

司会者：馬場天信（追手門学院大学、KIPP 精神分析協会）

話題提供者：宮田智基（清風会 香良病院、KIPP 精神分析協会）

野原一徳（バイオメンタルクリニック、KIPP 精神分析協会）

長川歩美（A&C 中之島心理オフィス、KIPP 精神分析協会）

指定討論者：川畑直人（京都文教大学、KIPP 精神分析協会）

**企画趣旨**

この分科会では、対人関係論の鍵概念の一つである D.B. スターンの「未構成の経験 (unformulated experience)」を取り上げます。未構成の経験とは、「無意識」についてのもう一つの考え方であり、言葉によってはっきりと構成されることで意識化される前の状態にある経験を指す概念です。

フロイトの考えた無意識とは、言葉で十分に構成された経験が「抑圧」されたものでした。未構成の経験とは、これまで意識の中に持ち込まれたことのない素材であり、感情を伴った形ではっきりと認識されたことのない経験をいいます。また、未構成の経験は「解離」と密接な関係があり、スターンによれば、「解離」とは未構成の経験を構成することを防衛的に回避する事態であり、一般に「抑圧されている」と言われる経験の多くは、単に未構成の状態にとどまっていると考えられます。

こうした「未構成の経験」、「解離」といったテーマを巡って、宮田、野原、長川の3人が話題を提供し、川畑の指定討論によって議論を深め、全体でのディスカッションにつなげたいと考えています。

**話題提供：宮田智基（清風会 香良病院、KIPP 精神分析協会）**

サリヴァンの「セルフシステム」の概念は、不安を喚起する経験の構成を阻み、馴れ親しんだ一定のものの見方や考え方、行動の仕方、経験の構成の仕方を続けることで安全感を得ようとする心の動きをいいます。セルフシステムには、重要な他者によって対応された経験だけが取り込まれ、重要な他者に強い不安を喚起するために十分な注意を払われなかった経験は、「自分でないもの (not me)」として子どもの経験から「解離」されてしまいます。そうして未構成のままにとどまった「解離された自己」「自分でないもの」は、CL-TH 関係にどのような形で現れるのでしょうか？今回は、そうした「対人関係的現象としての解離」について、考えてみたいと思います。

**キーワード：**セルフシステム、解離、未構成の経験

**話題提供：野原一徳（バイオメンタルクリニック、KIPP 精神分析協会）**

心理面接における未構成の経験は、エナクトメントの経験としても考えることができます。象徴化されたり葛藤化されたりしていないがゆえに、エナクトメントに気づいた時は何かが起こっているようではあるがひっかかる感じがするばかりでよくわからない状況だったりします。また、既に切羽詰まった状況であったり、頭を抱えなくなる状況であったりすることも珍しくありません。そこではセラピストは不可避免的に自身の未構成の経験に身を浸し、触れられていなかったり傷つきやすい部分、と向き合うことにもなるでしょう。当日はこのような出来事の相互的な関係性について議論していきたいと考えています。

**キーワード：**解離モデル、エンナクトメント、驚き

**話題提供：長川歩美（A&C 中之島心理オフィス、KIPP 精神分析協会）**

「未構成の経験」は、もともとサリヴァンが用いた用語でした。未構成の経験は、言葉ではっきりと捉えられて主体の中に位置づけられる前の状態にある経験、意識的な経験になる以前の経験を表します。スターンは未構成の経験をサリヴァンの用いた意味としての「慣れ親しんだ混沌」であると同時に、「創造の源となる無秩序」であると捉えています。そしてサリヴァンの選択的非注意の理論だけでは未構成のものを意識の中に持ちこむのは難しいとし、未構成の経験そのものが備えている自律的な結晶作用について、創造性の観点から考察しています。ここでは、未構成の経験が創造の源となる無秩序として活かされることを可能にするスターンの考えるセラピスト

のあり方、およびCL-THのあり方について、考察してみたいと思います。

**キーワード：**未構成の経験、慣れ親しんだ混沌、創造の源となる無秩序

○参考文献

「精神分析における未構成の経験—解離から想像力へ—」 D.B. スターン著 一丸藤太郎、小松貴弘監訳 誠信書房

**③精神分析的心理療法の原点を探る～現代自己心理学と関係論の立場から～**

企画者：富樫公一（甲南大学、栄橋心理相談室、TRISP 自己心理学研究所）

司会者：中西 和（あいせい紀年病院臨床心理室）

事例提示：峯石裕之（独立行政法人国立病院機構香川小児病院）

指定討論者：角田 豊（京都連合教職大学院、京都産業大学）

安村直己（甲子園大学）

**企画趣旨**

精神分析はフロイトが整理した心のモデルによって公式化された特別な理論によってではなく、ブロイエルとアンナ・O が出会ったという幸運——時という天才の力ともいえる——によって定義される科学である。言い換えれば、誰かが内的な世界を語り、他者がそれを説明できるように共感的にその話を聞くのが精神分析の基本状況なのである（Kohut, 1980, p. 239）

コフォートはこの言葉を通し、精神分析の本質は、二人の人が出会い、職業的立場を持つ一方が、他方の主観的世界を説明できるようにデータを収集し続けることだと述べた。彼にとって、精神分析臨床は特別なメタ心理学や治療技法によって規定されるものであってはならなかったのである。当たり前のこの言葉かもしれないが、私たち臨床家はどれだけそれを忘れやすいものだろうか。

フォーラムが学会化して第一回大会となる今回は、コフォートの言葉に立ち返り、精神分析的な心理療法とはなんなのか、その原点を考えてみたい。

**司会：**中西 和（あいせい紀年病院臨床心理室）

神経症の治療技法として出発した精神分析は、その始まりにおいて症状の除去を治療の目標として強調している。しかしわれわれが日常接するクライアントには、症状の除去や明らかな適応の改善に至ることが難しい事例が少なからず存在する。今回検討する事例は、ほぼすべての運動機能を失ってしまった若い男性患者であり、われわれセラピストが安易に希望や楽観をもつことを許してくれない。このようなクライアントとかかわるとき、その糸口をどこに求めるのか、彼らのニードは何なのか、われわれは何を提供することができるのか、そして治療という相互作用の中でクライアントにとって意味ある体験とは何なのか。人どうしのかかわりにおけるもっとも本質的な点について、語りの内容と、かかわりの中で立ち上がる両者のアクションを中心に、フロアの皆さまとともに検討していきたい。

**キーワード：**自己感 共感的理解 患者にとっての希望

**事例提示：**峯石裕之（独立行政法人国立病院機構香川小児病院）

演者は30年以上にわたり、筋ジストロフィーを始めとする重症心身障害児（者）、筋萎縮性側索硬化症（ALS）などの様々な障害者臨床にかかわってきた。そこで身体的及び知的障害からくる様々な意思の疎通に困難を抱える方々との面接を経験してきた。そうした中、事故により心肺停止状態に陥り、その後蘇生するものの極めて重度の肢体不自由、言語の表出（構音）能力、視力喪失を抱えることとなった少年との印象的な出会いがあった。面接者自らは50音を順次発声し、少年はわずかな機能（「かすかな頷き」か「瞬き」）で応えることで意思疎通をするというものであった。面接者は的外れな応答になる危惧を感じながらも、少年の体調を考慮に入れて、直感的に推量して対話を進めていく中で、少年が意思表示する言葉よりもはるかに多くを語り、はるかに多くの感情表現をしつつ応答していった。それは極めて限られたコミュニケーション手段を通じてのことではあったが、少年の内面にふれると同時に、気持ちの揺れを深く感じる経験でもあった。

このセッションでは何が行われていたのだろうか？ 少年にとってこの面接がどのような体験だったのだろうか？

この度、標準的とは言えないこのような心理療法のプロセスを提示し、人の内面に關わる作業の意味について改めて考える機会となればと思う。

**キーワード：**最重度肢体不自由 言語表出能力の喪失 特殊な意思疎通方法

**指定討論：**角田 豊（京都連合教職大学院、京都産業大学）

コフォート（1959）は、内省と共感を精神分析におけるデータ収集の中心に据えた。つまり、ク

クライアントの体験世界のありように接近し理解するために、治療者は自らの主観を代理的にクライアントの立場に置くことが必要であり、そうした作業が精神分析の本質であると考えたのである。こうした関わりは、試みの同一化といえるであろうし、治療者の感情機能と認知機能が共に働く必要があるといえる。

また、共感・共感的理解は、治療者が単に一方的に行うものではなく、クライアントが共感された（されなかった）と体験することと対になっており、その実際は相互作用から生じるひとつのモーメントと呼べる出来事である。治療作用から考えると、クライアントの内的な主観世界は孤立したものではなく、インプリシットとエクスピリシットの両方の水準において、他者と共有され、抱えうるものであると体験される可能性が生まれることにその意義があるのだろう。

本事例の検討を通して、上記の観点から考えていきたいと思う。

**キーワード：**共感 共感的理解 モーメント

#### **指定討論：**安村直己（甲子園大学）

「心理療法とは何か」について考えることは「心理療法の治癒因子とは何か」を考えることに等しい。伝統的な精神分析療法では、中立的な治療者が患者に客観的で正確な解釈を投与し、患者がそれによって洞察を獲得することで治癒がもたらされるものと考えられてきた。しかし、現代の精神分析は、禁欲原則を守った治療者が患者に解釈を与える治療から、治療者と患者の関係性を重視し、治療者と患者が共同で構成する治療的相互交流の創出へと変わりつつある。そこでは、これまで禁忌とされてきた、あるいは極めて慎重に扱われるべきものとされてきた治療者のアクションや自己開示、逆転移などが治療的相互交流を構成しているかもしれないという新たな視点が導入されている。

現代自己心理学派のバコール（1998）は、精神分析的な心理療法の治癒因子は、治療者が与える解釈や理解の内容にではなく、治療者の応答性そのものにあるとして、治療者の「至適な応答性 optimal responsiveness」という概念を提唱し、治療的に有効な応答性とは「その患者とその治療者とのその組み合わせにおいて、その瞬間に特異的に決まる」という新たな視点を提出している。本事例の検討は、そうした精神分析的な心理療法の本質について改めて考え直す、非常に貴重な機会となるだろう。

**キーワード：**治癒因子 治療的相互交流 治療者の応答性

**④学校教育現場において精神分析的であるということ**

企画・司会者：上田順一（大倉山子ども心理相談室）

演 者：上田順一（大倉山子ども心理相談室）

人見健太郎（みとカウンセリングルームどんぐり）

植木田潤（独立行政法人国立特別支援教育総合研究所）

指定討論者：服部真紀子（弁天メンタルクリニック）

佐藤由美子（公立中学校スクールカウンセラー）

**企画趣旨**

学校教育現場は、その時代時代の変化に求められた対応を迫られ、昨今では、小1プロブレム、いじめ、発達障害、虐待の問題等々、家庭の支援や地域とのつながりをも視野に入れた教育実践を求められ、教員は身体的にも精神的にも余裕を無くしている。折しも度重なる産業経済の破壊的構造変化は教職員の人員削減につながり、教員の資質は事務処理の速さにデジタル化されている。その結果、休み時間や課外に子どもに関わる教員が少なくなった。このような学校教育現場の現代的状況は、教育相談活動に対しても、指導・助言のデジタル化とその処理スピードを要請している。本分科会では、学校教育現場と精神分析というデジタル化され得ない何かを見つめ、考え、保持する文化の邂逅を描写してみたい。学校教育現場の内外で精神分析的な心理療法を実践している発表者が話題を提供し、フロアの方々と一緒に、学校教育現場で精神分析的であることについて考えていく。

**演題1：上田順一（大倉山子ども心理相談室）****スクールカウンセリングにおいて精神分析的であるということ**

スクールカウンセリングには、直近の具体的な解決は必要なく、多少の行動化はあるものの、ささやかではあるが、相談者本人にとっては心的苦痛が甚だ深刻になっている事例がある。発表者は、このような事例の場合、精神分析的な志向を持ってカウンセリングに臨んでいる。精神分析的な設定を呈示された児童、生徒は、それまで滞っていた知ることへの動機を高めることになる。精神分析的な志向およびその設定という、通常において第一に連想されるのは、カウンセリングの枠組みの維持、言い換えれば、治療構造の堅持ということであろう。しかしながら、学校文化においてカウンセリングの枠組みや構造を堅持することは、児童、生徒の学校生活時間の多様性を考えると現実味がない。枠組みや構造の堅持が行き過ぎれば、カウンセラーは学校文化への適応障害となり、カウンセラーそのものの排除にもなりかねない。このように考えると、学校文化において精神分析的であるということは、そのこと自体荒唐無稽なことなのだろうか。発表者は、スクールカウンセリングにおいて精神分析的であるための根本的な要素は、フロイトの精神分析的治療に対する重要な示唆、平等に漂う注意であると考えている。発表では、この内的なカウンセリングの枠組み、構造の堅持ともいえる平等に漂う注意に焦点を当て、些少のビネットを提示しながら、スクールカウンセリングにおいて精神分析的であることを論考したい。

**キーワード：**精神分析的、治療構造、平等に漂う注意**演題2：人見健太郎（みとカウンセリングルームどんぐり）****ある学校の閉校に伴う混乱とスクールカウンセラー —対象関係論の視座から—**

私は公立高等学校でのスクールカウンセラー（SC）を始めて13年になる。その中で、閉校が決定した学校を担当した際に経験した、生徒も教師も傷ついている中で賦活された対象関係やそこで顕在化した様々な問題との相互作用を報告する。一般的な心理療法においても「終結」は離乳に起源を持つとされる様々な空想を刺激するが、閉校という「与えられた」事態に遭遇した場合も同様で、喪の作業は困難になる。第二次ベビーブーマーの受け入れ先として理想化された「私たちの町の普通科高校」は、少子化の時代にあっては、深い傷つきや複雑な家庭環境を持つ生徒の集まりとなった。生徒の自尊心の低さは顕著で、行動化で否認や躁的防衛を繰り返す生徒の対応に教員は疲れ果てていた。もはや基底的思想グループとなった学校には、生徒の傷つきをコンテインする力がなくなり悪循環に陥った。閉校決定後、生徒たちは迫害的な性質を帯びた感覚を抱き、「閉校記念行事」として催された行事は一部教員による喪失の否認の現れと思われた。閉校決定後のリストカットや性的逸脱行動が学校全体の否定的イメージを決定的にしたようであった。

傷ついた生徒と教員の中で、こうした生徒を巡って様々な対立が起こったが、当日は、この全体状況を、精神分析的に、とりわけ対象関係論的視座を軸に考察し、SCの役割を振り返りたい。

**キーワード：**閉校（与えられた終結）、基底的思想グループ、喪失の否認と行動化

**演題3：**植木田潤（独立行政法人国立特別支援教育総合研究所）

### **学校コンサルテーションに精神分析的な理解を持ち込むことの意義**

障害児教育と通常教育の「場」を分離する特殊教育の時代から、場を分けず、通常教育の枠組みの中で個々の子どもの教育的ニーズに応じて学びのスタイルを多様化させる「特別支援教育」への大きな変化を迎え、学校教育の現場は、これまでに類を見ない混乱を経験することになった。これらの動向を精神分析的視点から俯瞰してみた時、特殊教育から特別支援教育への移行が学校組織と個々の教員、児童生徒の心身に与えるインパクトは、妄想-分裂ポジション

Paranoid-Schizoid Position から抑うつポジション Depressive Position への展開にも比する、根源的な質的变化を強いる経験となり得る。通常教育から split off されていた児童生徒の存在が、内的な成熟の結果ではなく（制度上の）外的な要因によって否応なく通常教育に接近したことで、学校は迫害的な不安に圧倒され、従来の教育観や万能感の喪失に向き合えない等の心的な危機を経験している。そうした個々の心的危機は、児童生徒の学びを支える心的な器 container/contained となるべき学校組織を、さまざまな葛藤や解体の不安に曝している。こうした心的変化に伴う不安や苦痛を消化して成長や成熟の糧となすために、精神分析的な心理療法の知見と実践がどのように役立つのか、事例を交えた考察を提示してフロアの方々と一緒に考えてみたい。

**キーワード：**学校コンサルテーション、関与しながらの観察、container/contained

**指定討論：**服部真紀子（弁天メンタルクリニック）

### **学校教育現場外で子どもに関わる心理士として知りたいこと**

子どもと関わって行く中で、親や教職員、オリエンテーションが異なる医師や他職種の人に、精神分析的な枠組みや精神分析的な理解をどのように伝えて行けばよいのか、その対応や連携の仕方について討論したい。また子どもの心理的な問題に対し、子どもが現実的に適応すること、例えば学校に行くようになることや、症状が消失することで十分なのか、それとも心理的な適応や成長をも促すべきなのかについても討論したい。

**キーワード：**現実適応、心理的適応、連携

**指定討論：**佐藤由美子（公立中学校スクールカウンセラー）

### **スクールカウンセラーとして知りたいこと**

今年度から初めてスクールカウンセラーとして勤務しているが、教職員に現実的な問題解決へのアプローチを求められ、意識せずその求めに応えようとしてしまうことがある。子どもに関わる際に、精神分析的な視点を持って子どもに関わるか、そうしないのかという判断は、どのようにしているのだろうか。また精神分析的な視点で子どもに関わることで、子どもについて理解が広がり、深まって行くと感じるのはどのような時なのだろうか。これらの点について討論したい。

**キーワード：**問題解決へのアプローチ

**⑤スターンの臨床と未構成の経験**

企画・司会者：川畑直人（京都文教大学、一般社団法人京都精神分析心理療法研究所）

話題提供者：鈴木健一（名古屋大学、一般社団法人京都精神分析心理療法研究所）  
吾妻 壮（大阪大学）

指定討論者：横井公一（浜寺病院）

川畑直人（京都文教大学、一般社団法人京都精神分析心理療法研究所）

**企画趣旨**

関係精神分析の旗手D.B. スターンの臨床センスをスーパーヴァイジーとして吸収した二人の精神分析家に、スターンの臨床スタンスの一面をまとめてもらいつつ、彼の提示する「未構成の経験（unformulated experience）」について語ってもらおう。それらについて関係論の立場からと、対人関係論の立場から、論評を試みる。

**話題提供：**鈴木健一（名古屋大学、一般社団法人京都精神分析心理療法研究所）

スターンとの1年半にわたるスーパーヴィジョンは、とても刺激的で、無意識とはどういうものか、それを意識化するとはどういうことなのかを、身をもって、時に傷つきながら、体験をすることができた。スターンから指摘されたエピソードを交えつつ、どのように慣れ親しんだ混沌（未構成の経験）を構成していけばよいかを論じたい。

**キーワード：**未構成の経験、慣れ親しんだ混沌、無意識

**話題提供：**吾妻 壮（大阪大学）

スターンの「未構成の経験」概念のその後の展開を論じることを目標としたい。スターンは、近著 Partners in Thought の中で、逆転移の認識可能性という問題提起を行い、その関連において、心の多重性、解離性について論じている。スターンによれば、エナクトメントとは精神内葛藤の不在の現れであり、したがって精神内葛藤は分析過程において初めから所与のものであるというよりもある種の達成であるという。このような概念化の道筋を辿り、その臨床的含意を論ずることができればと考えている。また、スターンのスーパーヴィジョンを通して私が感じた彼の臨床姿勢について話したい。

**キーワード：**エナクトメント、解離、精神内葛藤

**指定討論：**横井公一（浜寺病院）

ミッチェルの「単一の自己と多重の自己 singular self vs. multiple selves」の弁証法の観点から、スターンの「未構成の経験」概念にアプローチしたいと思います。スターンによる「未構成の経験」が自己の感覚に組織化されるときの自己組織化の様相を、ミッチェルの関係精神分析の観点からの自己組織化の議論と対比させて論じることを試みます。

**キーワード：**関係性 relation, 自己組織化 self-organization, 間主観性 intersubjectivity

**指定討論：**川畑直人（京都文教大学、一般社団法人京都精神分析心理療法研究所）

私は、精神分析の過程を、発話された内容の意味的分析の過程と捉えるのか、発話行為を含む行為的次元の相互交流と捉えるのか、という問題に関心を寄せている。指定討論では、話題提供者の発題を受けて、未構成の経験という概念を、こうした観点と絡めて考えてみたい。特に、Sternが指摘する「バーバル」と「ノンバーバル」の入り込んだ関係性は、臨床精神分析のプロセスを理解するうえで非常に有益である。さらにこれらの議論に、体験知 experiential knowing という Joseph Barnett の考え方を重ねながら論じてみたい。

**キーワード：**未構成の経験、バーバルなものの中にあるノンバーバルなもの、体験知

**○参考文献**

「精神分析における未構成の経験—解離から想像力へ—」 D.B. スターン著 一丸藤太郎、小松貴弘監訳 誠信書房



**⑥クライン派と対人関係学派との対話—事例検討を通して—**

企画者：金沢 晃（美作大学生生活科学部、NPO 法人子どもの心理療法支援会）  
宮田智基（清風会 香良病院、KIPP 精神分析協会）

話題提供者：平野かおり（竜安寺カウンセリングルーム、KIPP 精神分析協会）  
溝端伸枝（谷町こどもセンター・関西心理センター、NPO 法人子どもの心理療法支援会）

指定討論者：金沢 晃（美作大学生生活科学部、NPO 法人子どもの心理療法支援会）  
宮田智基（清風会 香良病院、KIPP 精神分析協会）

**企画主旨**

精神分析的な心理療法の訓練では、特定の訓練機関に所属し、そこでの継続的な訓練を通じて、その学派の臨床思考を身につけていくことが望まれる。そして、いずれは学派の制約に関わらず、各自が臨床実践の中で、精神分析的な心理療法とは何かを考えるプロセスを歩むことになる。

この分科会の目的は、異なる学派の訓練を受けたセラピストが、臨床実践を通してディスカッションをすることで、各学派の共通点や相違点を明確にしなが、それぞれの取り組みを振り返り、上記のプロセスを歩む一助になることを目指すものである。対人関係学派とクライン派の立場から、それぞれ一事例を報告して検討し、対話を通じてお互いに学び合う機会にできればと考えている。

**指定討論：**金沢 晃（美作大学生生活科学部、NPO 法人子どもの心理療法支援会）

**クライン派の立場から**

精神分析的な心理療法は、転移が展開する設定を構築し、そのプロセスを追う営みであるということが出来る。クライン派は、特に逆転移について考えることを、クライアントの転移とその展開について考える上で重要視している。セラピストに生じる反応を、クライアントの内的世界の投影に対する反応として考えるのである。それゆえ、セラピストは逆転移の吟味を含めた観察的態度を維持することが求められるし、例えばタヴィストック・クリニックで訓練の一環として行われてきた乳児観察は、そのような観察的態度について学ぶ重要な訓練の一部である。セラピストに生じる反応をあくまで観察素材として考えるという点は、対人関係学派とは異なるように思われる。当日のディスカッションは、事例検討を通して、お互いの営みを振り返り、交流する機会としたい。

**キーワード：**学派間の対話、訓練、逆転移

**指定討論：**宮田智基（清風会 香良病院、KIPP 精神分析協会）

**対人関係学派の立場から**

対人関係学派では、「心の問題は対人関係の中で生じ、対人関係の中に現れる」と考え、クライアントとセラピストとの関係を含めた対人関係の相互作用に注目する。セラピストも知らず知らずにクライアントの対人関係のパターンにはまり込み、「変容」させられ、様々な感情・感覚体験をしながら、クライアントの過去の相手役を演じるはめになる。セラピストは逆転移をモニターしながら、クライアントとの相互作用の中で起きていることを吟味し、対話のテーブルにあげることを試みる。

セラピストのスタンスとしては、サリヴァンは「参与観察者」と考え、セラピストは生身の person として面接関係に身を投じると考えた。フロムはより「参与」に重点を置き、セラピストは「観察する参与者」と考えた。こうしたセラピストのスタンスは、クライン派と異なる点であると考えられ、当日のディスカッションの1つのポイントになるのではないだろうか。

**キーワード：**対人関係の相互作用、参与観察、Th のスタンス

**①臨床場面における初回夢の意味とその取り扱いについて**

演 者：広瀬 隆（帝塚山学院大学、北大阪こころのスペース）  
垣内宏樹（吹田市立教育センター、北大阪こころのスペース）

心理療法の初期において、クライアントが語る主訴や問題歴、取り巻く状況に加えて、夢が自発的に語られることもままある。また、夢を素材とすることの重要性を感じるセラピストは自らクライアントに夢を尋ねることもあろう。ユングは、分析過程における初回夢について、後の心理療法進展の途上で示される心理的な素材を描き出している可能性を示している。確かに、心理療法の初期に語られる夢については、その重要性をあとでより一層感じることもあるだろう。しかし、一方で、初回夢の取り扱いを金科玉条とし、過程の1つとして位置づけることがおそろかになる危険もある。

今回の発表では、ユングによる記述や後のユング派の見解だけでなく、夢の取り扱いを巡る精神分析の他の潮流からの見解も参照しながら、実際の心理療法場面での初回夢にまつわる諸問題について検討する。まず広瀬がいくらかの臨床例もまじえて初回夢について、とくにその意味付与にまつわる問題について概説する。その後、垣内が自らの事例をもとに、初期に示された夢をどのように考え、後の過程にどうつなげ対応したのかについて発表を行う。セラピストが変わると見る夢も変わると言われるように、セラピスト-クライアント関係にも大きく左右される夢見について、結論を引き出せないにしても、臨床的により妥当な見解を導く試みの1つとしたい。

キーワード：初回夢、見立て、夢素材

**②人形遊び技法による就学前児童の発達水準と表象世界の評価**

演 者：石谷真一（神戸女学院大学大学院人間科学研究科）

人形遊び技法とは、面接者が人形等を用い話の出だしを対象児に演じて見せ、その続きを児童に作らせるものである。出だしには情緒的葛藤やジレンマが含まれ、児童がそれらに如何に対処するかをお話作りを通して観察する。中でも Emde, R. らが開発した MSSB (MacArthur Story Stem Battery) は、幼児の愛着、ナラティブの発達研究とともに、臨床問題を抱える幼児の表象世界の評価に欧米では役立てられている。発達途上の児童が呈する臨床問題は、児童の発達水準と表象世界 (Greenspan の心の舞台とドラマ) の両面から評価する必要があるが、MSSB による人形遊び技法はそれに適うものと考えられる。すなわち、課題の理解やお話作りのプロセスからは前者の、面接者との関係性やお話のテーマ・内容からは後者の評価につながる情報が得られると期待される。

筆者は学生の臨床実習を兼ねて幼稚園年長児を対象に MSSB を実施し、後日幼稚園教諭にフィードバックを行い、合わせて対象児の情報を得て MSSB の反応との照合を行ってきた。今回は人形遊び技法の実際を紹介し、過去3年間に実施した54事例(健常児)を対象に、児童の発達水準や表象世界が MSSB 反応から如何に推察されるかを、分類指標に基づく量的分析のほか、特徴的な事例の系列分析を素材に検討する。

キーワード：人形遊び技法、就学前児童、発達水準と表象世界

**③精神分析的心理療法における「的確な説明の提供」の有用性について**

演 者：清川雅充（柏崎厚生病院）

フロイドの患者との現実的なやりとりは有名だが、一者心理学ではこれは逸脱行為でしかなかった。しかし、これはビューチューラーと訓練分析家に見られる行動とほぼ同様に考えられる。最近の複雑系理論に拠ると、このような想定領域外の要素が入り込む余地は、当然予想されたものであると捉えられる。つまり、現代的な視点では、フロイドは相互交流を用いた先駆けと言え、私には興味深い。

①筆者の技法的な背景：関係性理論は、アンチ欲動論として出発したものである。しかし先述のように捉えると、筆者には欲動を標的とした技法やフロイド理論も、他の様々な分析理論と同様に統合できると考えられる(≒特異性理論)。この事自体意義ある事だと思われるが、今回例示する臨床ビネットは、このように包括された形態の中の1部である。

②本論：さて、筆者は治療に大切と思われる要素はできるだけ取り入れており、自己心理学的な技法についても同様である。現実的な相互交流においては、筆者は「説明」を良く用いるが、これは精神分析的な治療では支持技法(保証や説得)のがどうしても必要だからである。ここでBacalは「provision of accurate explanation(的確な説明の提供)」は、重要な自己対象体験を構成すると論じる。つまり「的確な説明の提供」は鏡映や理想化自己対象体験の提供と同様に位置づけられよう。今回は臨床ビネットを用いて筆者の用い方を例示し、その治療的意義を共有したい。

**キーワード**：関係性理論、的確な(正確な、行き届いた)説明の提供、自己対象関係の構成

**④短期力動的集団精神療法における薬物依存症者に対する構造的介入と心的安全空間の生成過程**

演 者：ジェイムス朋子（京都橘大学健康科学部）

辻 啓之（京都刑務所）

薬物依存症者に対する精神分析的なアプローチの有効性を探求するものは少ない。我々は、薬物依存症者に対し12回の短期集団精神療法の機会を与えられ、その限られた時間を最大限有効に使うための治療構造的な介入を検討し試行した。単一事例としての限界は大きいですが、本発表では、この試行事例の検討を通じ、薬物依存症者に対する短期力動的な心理教育的集団精神療法プログラムとしての治療的成果を検討することを目的とする。介入として、モザイク・メイトリックス技法(小谷 2010)を基本とし、リーダーが何らかのテーマにおいて各人に短く話をさせ、他のメンバーと発言をつながず、それを繰り返すことを基本の形とした。葛藤をあまり起こさせず、内容よりも話をすること自体を支持し、同時に、リーダーとの協働体験を通じて、グループに所属する安全な体験を得られることを意図した。

結果として、グループ外での行動化により参加不能になった3名のドロップアウトが生じた事態になりつつも、残った4名には、断薬への現実的な不安と意志、葛藤保持の明確な感覚とその肯定感、集団体験への愛着と希望、指導者への愛着と信頼や感謝が多く語られるようになり、安全な集団体験と言語化の肯定的体験を得たことが見られた。

当日の発表では、セッションを概観し、これらの変化の生じた鍵となる要因とその力動を考察したい。

**キーワード**：短期力動的集団精神療法、薬物依存、モザイク・メイトリックス

**⑤アスペルガー症候群の混乱状態とマネージメント—認知・情緒的偏りの発達過程の理解と対応—**

演 者：吉沢伸一（ファミリーメンタルクリニックまつたに）

本発表では、横断的診断のみでは広汎性発達障害、場合によってはアスペルガー症候群とされる児童との精神分析的な心理療法過程を素材とし、発達障害あるいはアスペルガー症候群と言われる中のある一群の認知的偏り、及びそれに付随する（或いは先立つ）情緒的偏りの発達過程について考察を行う。心理療法過程において、男児は精神病破綻を経験するが、入院治療を行わず、外来での週3回の心理療法セッションと、“在宅でのケア”（Winnicott, 1955）を可能とするための両親（主には母親）へのマネージメントが、セラピストである私と主治医で連携して行われた。

混乱期では、男児は優勢な認知様式（強固な防衛）が崩れ、その背後にある「名づけようのない恐怖 nameless dread」（Bion, 1962）と自己の基盤のなさが明瞭となった。その回復過程においては、やはり同様の防衛が組織化される傾向にあったが、分析的関与とマネージメントに基づく母性機能により、脆弱な自己は幾らか基盤を持ち始めた。男児の独特の認知・情緒的偏りは、（素因的要素もあろうが）「環境としての母親」「対象としての母親」が適切に供給されなかったことと、幼児教育や能力開発の名のもとに行われる機械的な訓練作業を提供する言わば“偽物のよい対象”とも呼べるものの影響が大きいことが理解された。分析的な情緒交流は、男児を脅かしたと同時に、新たな発達可能性を促進する機会をもたらした。

**キーワード：**アスペルガー症候群、精神病破綻、認知・情緒的偏り

**①発達障害の世界の探求—精神分析的アプローチ**

演 者：平井正三（御池心理療法センター）

事例提示：松本拓真（佛教大学学生相談室）

淀 直子（佛教大学臨床心理学研究センター・心理クリニック）

**趣旨**

発達障害（自閉性スペクトラム障害）を持つ子どもの精神分析的な心理療法について考えていくワークショップ。まず平井が自閉性スペクトラム障害への精神分析的アプローチについて簡単に概説し、学童期の軽度の広汎性発達障害の事例について松本が、思春期の事例については淀が報告し、フロアを交えて討議していく。

**②トラウマの精神分析的な理解と臨床—フェレンツィから現代精神分析まで**

演 者：森 茂起（甲南大学文学部人間科学科）

**趣旨**

近年、世界の精神分析において、トラウマの理解と治療的扱いは最も重要な課題の一つとなっている。PTSDの概念の成立にはじまるトラウマ臨床の広がりの中にあって、精神分析的な思考と実践がどのように貢献できるかが問われている。本ワークショップでは、私の経験から「トラウマを精神分析的に扱う」ことについて考えてみたい。内容は次のような構成からなる。

1. トラウマに関するフロイト理論の変遷
2. フェレンツィの実践と理論

フェレンツィが晩年に展開したトラウマ論は、フロイトの初期の実践への「回帰」の側面を持つ。しかし、それは単なる「回帰」ではなく、トラウマ体験における「関係性」の理解、および、記憶の再構成と解離の解消という目標設定において、新しい視点を切り開くものであった。

3. 現代精神分析におけるトラウマの治療的扱い

今世紀に入って書かれたいくつかの論文に触れながら、トラウマに注目する精神分析家の議論を紹介する。

4. まとめ

以上の議論を踏まえながら、トラウマの治療的扱いについて考える。考察の焦点は、「人生史の再構成」の課題と、「治療関係」の問題に当てられる予定である。

**③精神分析的な小集団心理療法における心的安全空間の設計～事例検討を通じて～**

演 者：ジェイムス 朋子（京都橘大学健康科学部）

事例提示：橋本麻耶（PAS 心理教育研究所）

**趣旨**

小集団精神療法は、1970年代に主にアメリカにおいて、精神分析や精神療法が成立しにくい境界例などの困難患者に対して急速に発展した心理処方である。小集団は、自我同一性の混乱あるいは自己のまとまりや凝集性を喪失した人々に安定した母性機能、健全な三者力動、そして人を育てる集団体験を並行して提供することが可能になることから、個人心理療法へ導入が難しい困難患者や、個人境界の脆弱な精神病理を抱える患者、破壊的な行動化を起しやすい患者などに対して行われてきた。

一方、今日、急速なグローバル化や通信手段の変化、家族環境の変化などを背景として、易行動化やうつの問題などに現れているように、個人の傷つきやすさは蔓延しているように感じる。病院や相談機関、受刑施設などでグループに参加する方々だけでなく、日々出会う青年たちの中にも、話をすることに慣れておらず、人と本当に出会うことの意味を感じることができず、集団と出会い葛藤する機会にあまり恵まれてこなかった人々が多くいる。精神病理を抱える患者群への治療処方としてだけでなく、予防的心理教育としても、精神分析的な小集団精神療法が現代、そしてこれからの社会に果たす意義は大きいと考えている。実際、学生相談では、アイデンティティグループやランチタイムグループ、居場所の提供など、グループ事態を利用したサポートは多く行われているし、小中高の学級集団の中で行われるグループ・ワーク、病院や介護施設でのデイケア、災害復興支援の中など、さまざまな場所で、グループを利用した心理教育的なグループ・ワークは大きな展開を見せている。

しかしながら、グループはグループ空間を安定したものにできなければ、逆に不安を増大させ、時に精神病的な不安を連鎖させ、またメンバーの行動化を刺激する。従い、さまざまなグループの開始期、もしくは不安の高い群や易行動化群に対して実践されるグループには、グループの現実性をある程度維持し、転移の複雑化を抑制して、グループを心的安全空間として設計し構造化する基礎技術が必要である。ある程度の基本となる構造を保持し、集団力動を安全なものに調整できるならば、先に挙げたように、参加者は、安定した母性機能による安心感の体験と、健全な三者力動によってエネルギーが賦活される体験、さらに集団アイデンティティの実感を豊かに味わ体験ができ、集団は人を育てる集団として大きな力をもつものとなる。緻密に設計された集団精神療法だけでなく、さまざまな場所、さまざまなオリエンテーションで行われるグループワークも、力動的な観点から組み立てた基本構造を取り入れることによってより安全に成長的なものとするができるだろう。

今回のワークショップでは、短期集中で行われた精神分析的な集団精神療法グループの事例を提示しながら、さまざまな処方グループを心的に安全な空間として設計するための基礎技術とその意義を学び合う機会としたい。

**④統合失調症の精神分析的心理療法入門**

演 者：青木滋昌（名古屋精神分析研究所、ニューヨーク NPAP 精神分析研究所）  
事例提示：青木滋昌（名古屋精神分析研究所、ニューヨーク NPAP 精神分析研究所）  
寺田葉子（名古屋精神分析協会）

**趣旨**

統合失調症に対する治療法として、精神分析の分野では、スポットニッツ、セシュエーなどの先人たちの努力と研究により、症状の軽減だけではなく、人格構造の変化、情緒的成長を目指す心理学的アプローチが発展してきています。

近年、講師を代表とする名古屋精神分析協会の訓練プログラムにおいても、このアプローチを取り入れています。

そこでこのワークショップでは、実際の症例をもとに、統合失調症の精神分析的心理療法について学ぶ機会を以下の手順で提供いたします。

- (1) 基本理論、概念、テクニックの解説
  - ・ 象徴的実現
  - ・ 自己愛転移の理解と扱い方
  - ・ 攻撃衝動の言葉による発散
  - ・ 対象指向的質問とジョイニング・テクニック
  - ・ 情緒的相互交流・コミュニケーション など
- (2) 症例発表 その1 解説と質疑応答
- (3) 症例発表 その2 解説と質疑応答
- (4) まとめ

このテーマに興味・関心をお持ちの多くの方々の参加をお待ちしています。

**参考文献：**

- 青木滋昌（2011）『精神分析的治療で本当に大切なこと —ポスト・フロイト派の臨床実践から—』 誠信書房
- スポットニッツ, H. (1974) 『精神分裂病の精神分析 —技法と理論—』 岩崎学術出版社
- セシュエー, M. A. (1974) 『分裂病の精神療法 象徴的実現への道』 みすず書房

## ⑤「アルプスの少女ハイジ」とメタファーの理解

演 者：太田裕一（静岡大学保健センター）

### 趣旨

#### ■はじめに

スイスの作家ヨハナ・シュエーピリによる「ハイジの修業時代と遍歴時代」（1880）「ハイジはならなかったことができる」（1881）の2巻本は、日本においては明治期より100回以上異なるバージョンで翻訳され読み継がれてきた。また1974年に放映されたアニメーション「アルプスの少女ハイジ」を通じて、アルプスの大自然や天真爛漫なハイジというイメージをお持ちの方も多いのではないだろうか。

幼い頃に両親を亡くし、アルムの山でひとり暮らしをしている祖父の元に預けられた少女ハイジが、大人の都合でフランクフルトの大都市に預けられたりしながらも、自然の中で成長していくといういわばビルドゥングス・ロマンである。

今回のワークショップはこの「アルプスの少女ハイジ」を題材にして、精神分析的な連想を広げ、物語をメタファーとして理解してみたい。

#### ■精神分析と「アルプスの少女ハイジ」

実は「ハイジ」と精神分析の歴史には深い関連性がある。ハイジとクララはほとんどフロイトとブロイアーの「ヒステリー研究」に登場する症例の女性たちと世代を同じくする「ヒステリー世代」である。単に世代が同じというだけにはとどまらず、主要登場人物のハイジ、ペーター、クララはいずれも親との死別という外傷体験を経験している。そしてクララは母親の死、ワーカホリックな父親という家庭環境がもたらした心因によって歩行困難となってしまう転換ヒステリー、ハイジはアルムの山から大都市フランクフルトに無理矢理すまわされたことから解離症状を示し夢遊病となってしまう解離ヒステリーを症状として示すことになる。幸いにしてハイジの解離ヒステリーは、ゼーゼマン家の主治医の「アルムの山に帰る」という願望充足的な環境調整によって解消され、クララの転換ヒステリーもアルムの山の自然にふれることによって軽快していくのだが。

#### ■アニメーションと象徴解釈

このように「ハイジ」は精神医学的なモチーフを抱えた物語であるが、さらにこれを原作としてアニメ化された作品「アルプスの少女ハイジ」は宮崎駿・高畑勲という優秀なスタッフをそろえて優れた象徴表現がふんだんに使われた作品となっている。精神分析的な心理療法においてはもちろん言語が重要視されるが、夢の解釈などを考えてもわかるように、その体感やイメージによって喚起される何かが十分に味あわれた後に言語化されることによってさらに洞察が深まるものである。心理療法の訓練においても視覚や聴覚を活かすことは重要な要素なのである。

まったく未知のアニメを見る場合には、私たちは何がそこから展開していくのかを追っていくしかないが、「ハイジ」のような有名な物語の場合、すでに私たちが知っている全体のストーリーの中で今現在目の前に展開している物語の細部がどのように位置づけられるか考えながら見るのが可能である。これは生育歴という全体の情報を文脈としつつ、セッションのひとつひとつのやりとりの意味を比喩として捉えようとする臨床家の行為に重なる部分がある。

#### ■当日のワークについて

アニメ「アルプスの少女ハイジ」を視聴し、そこに展開するストーリーを夢の素材にみたとて、その深層的なものについて自由な連想を働かせ象徴的な解釈を行ってみたいと思う。特に言語以外で得られた情報を、通常の常識的な見方からではなく違う視点から眺めてみる練習をしてみたい。それはきっと実際の臨床の場面でも役に立つスキルとなるだろう。



**⑥詳細な質問入門—対人関係精神分析の基礎(2)**

演 者：川畑直人（京都文教大学、一般社団法人京都精神分析心理療法研究所）

**趣旨**

サリヴァンが提唱した詳細な質問 detailed inquiry という技法は、分析状況を二者の関わり合いとみなす対人関係精神分析において、学派を特徴づける象徴的な存在となっています。この技法は、丁寧にクライアントの情報を集めるという臨床の基本となるだけでなく、クライアントの行動軌跡をたどりつつ、解離して体験から欠落しているものに関心を向けるような、好奇心を二者間で育て上げていくところに重要な意味があります。このワークショップでは、2012年4月8日に行われた本フォーラム研修会 E（詳細な質問 detailed inquiry 入門—対人関係精神分析の基礎）を土台として、実践的なワークと事例検討を通して、質問がもたらす臨床の奥深さに触れていただくことを目指します。

前半では、模擬的な面接場面の録画記録をもとに、自分であればどのように質問を行っていくか、また、セラピスト役がどうしてそのような質問をしたのかを、グループで討論していただきます。具体的な面接場面のやりとりに即して考えることにより、面接における質問の用い方について、より詳細な検討ができると思います。後半では、研修参加者から事例を募り、1セッションの細かいやりとりについて紹介してもらい、同じように、質問の仕方について検討します。なお、全体でのグループ討論が重要ですので、定員は20名と限らせていただきます。

参加希望者は、あらかじめ [kipppmail@nifty.com](mailto:kipppmail@nifty.com) に参加希望のメールをお送りいただきます。20名の申し込みがあった時点で、一旦参加予約を打ち切らせていただきます。また後半の事例検討における発表者も募集します。参加希望者が20名を越えた場合でも、事例の発表者には、参加を優先させていただく場合がありますので、ご了解の程宜しくお願い致します。

**⑦子どもの精神分析的心理療法の基礎：児童養護施設編**

演 者：鵜飼奈津子（大阪経済大学人間科学部）

共同演者：秦 香（児童養護施設 博愛社）

堀内 瞳（大阪経済大学心理臨床センター）

辻内 咲子（大阪市こども相談センター）

**趣旨**

2001年、厚生労働省は「母子生活支援施設における夫等からの暴力を受けた母子および被虐待児等に対する適切な処遇体制の確保について」という通知を出し、続く2004年には児童福祉施設（児童自立支援施設、児童養護施設、乳児院、および母子生活支援施設）を対象に心理療法担当の常勤職員を大幅に増員する方針を定めました。これは具体的には、心理療法が必要であると認められた子どもが10名以上入所していることを基準に、心理療法担当の常勤職員を1名配置し、その運営費に人件費分を加算するというもので、各都道府県知事が各年度どこに指定することになっています。こうした国の政策を受けて、児童養護施設等には、多くの常勤・非常勤の心理職が配置されるようになってきており、2008年以降、企画者もそうした心理職の方たちと接する機会が少なくありませんでした。しかし、その勤務の実態や状況については不明確な部分が多いと感じられたため、2009年度に近畿圏内の児童養護施設における心理職の配置状況に関する実態調査を行いました（鵜飼、2010a/2010b）。この調査では、各児童養護施設における心理職の数（常勤・非常勤）や臨床心理士資格の有無、また具体的な心理職の職務内容（心理療法、アセスメント、職員とのコンサルテーション、生活支援など）などが明らかになるとともに、施設で実際に仕事をする心理職が、自らの役割について不明確であるといった悩みを抱えているという実情が明らかになりました。また、それぞれが適切であると感じられるような研修やスーパーヴィジョンの機会の不足も挙げられていました。2010年度には、これらの調査結果を受け、そうした心理職のためのグループ・ディスカッション形式による継続研修会を実施しました（鵜飼・堀内 2011）が、ここでもやはり、心理職の役割の明確化という課題とともに、「心理療法とはそもそもなんなのか」といった、根源的な問いも浮かび上がってきました。

そこで、今回は、子どもの精神分析的心理療法の実践の中でも、特にこうした児童養護施設という、子どもたちが実際に生活する場面における実践について検討するための機会を設けたいと考えました。まずは、子どもの精神分析的心理療法を実践するにあたっての基本的な事柄 一場の設定・心理療法への導入・振り返り・終結に向けて、といった一連のプロセス について、今一度、整理します。そのうえで、いわゆる従来の外来型の心理療法の実践とは異なる、児童養護施設における実践について、基本からの応用、および工夫の可能性について、講義を行います（約1時間程度）。

次に、2か所の児童養護施設における実践についての具体例を、現在、児童養護施設で心理療法士として勤務している複数の臨床心理士の体験をもとに、話題提供として提示します（共同演者）。そして最後に、企画者の司会・進行のもと、フロアーも含めてのディスカッションを行い、まとめとしたいと思います。

**（参考文献）**

鵜飼奈津子(2010a) 『児童養護施設における臨床心理士の活動状況の調査および今後の課題 I』  
大阪経大論集 60(5) 87-96

鵜飼奈津子(2010b) 『児童養護施設における臨床心理士の活動状況の調査および今後の課題 II』  
大阪経大論集 60(6) 241-252

鵜飼奈津子・堀内瞳(2011) 『児童養護施設に勤務する心理士のためのディスカッショングループの試み』大阪経大論集 61(6) 121-132

鵜飼奈津子(2012) 『子どもの精神分析的心理療法の応用』誠信書房